

伝えることよさを学ぶ音楽科学習

—第3学年「ふるさとの音楽」の実践を通して—

川口万里

1 音楽科で大切にしていること

本校音楽科では、「音楽のよさを感じ、自ら音楽を楽しんでいる子ども」をめざして取り組んでいる。

そのような子どもたちを育てていくために、授業の中で、①「なんて音楽っていいんだろう」と感じる体験②仲間とともに音楽のよさを感じ合う体験の、2つの体験を大切にしている。

昨年度まで、人と人のかかわりの中で音楽活動をする事により、感動を共有し、音楽を通して自分を表現することの喜びを味わうことをねらいとした取り組みを行ってきた。集団で一つの大きな音楽表現をつくるという活動を通して、子どもたちの意欲を引き出し、自ら達成感や満足感を味わっていくことができた。一方で、表現の工夫の中心が音楽よりも言葉や動作に傾いてしまった子どもが見受けられ、「音楽で伝える」という音楽ならではのよさを意識するという点が不十分であった。

そこで、今年度は、音楽でしか表現できないことに「気づき」、思いを伝えることよさ、表現できたことの喜びを「感じる」ことを豊かにしていく学習をめざしていきたいと考えた。

2 実践の概要

(1) 研究仮説

研究仮説

子どもの身近なことを題材とし、友だちとともに表現をつくっていく場を設定するならば、気づきや感じ方が豊かになるであろう。さらに、相手を意識して表現する場を設定するならば、表現の質が高まり、人とのつながりを感じるができるであろう。

音楽表現を通して、思いを伝えることよさを知るためには、まず相手に伝えよう、伝えたいという意欲をもつことが必要である。何を伝えるのかということをはっきりとさせて表現を工夫していくことにより、「伝えたい」という意欲は高まっていくであろう。そして、具体的にどう音楽で表現するかという課題に自ずと向き合っていくことができるようになると思う。その際、相手を意識して表現することによって、表現の質がよりいっそう高まることが予想される。集団活動の中で、音楽を通じて人と人とのつながりを感じ、それを大事に思う気持ちを育てたい。

(2) 題材名 「ふるさとの音楽（「海苔とり唄）」

(3) 題材について

上記の研究仮説と子どもの実態から、「ふるさとの音楽」という題材を設定した。

ここでは、身近なこととして、地域に伝わる民謡を教材として取り上げることにした。子どもたちが身近な地域社会に伝わっている民謡に関心をもち、その特徴やよさを感じ取りながら歌うことができるようにしたいと考えた。

3年生の児童は、低学年の時「おちゃらか」「かごめ」などの伝承遊び歌を学習した経験がある。しかし、アンケート調査を行ったところ、地域に伝わる音楽の演奏の経験はあまりないことがわかった。ほとんどの児童が、現在住んでいる地域の「盆踊り」や亥の子祭

りに参加したり、神社の祭り等の「祭り囃子」や「神楽」を鑑賞したりする経験をもっている。一方で、実際に民謡を歌ったことのある児童は数人で、広島民謡を歌ったことのある児童はいないという結果であった。

(4) 民謡「海苔とり唄」について

民謡とは、各地方の庶民の間で生まれ、その素朴な生活・感情を反映した歌謡のことである。(三省堂広辞林より) 我々の住む地域にも、人々の生活や心情と深いかかわりを持ちながら世代を越えて歌い継がれてきた民謡がある。その民謡を題材として取り上げることは、我が国の音楽文化のよさについて関心や理解をもち、深めていくために必要なことである。本校の位置する東雲町は、猿猴川の河口に近く、黄金山を見上げるところにある。海や川の埋め立てが進んだ昭和30～40年頃までは、黄金山のふもとの仁保沖や猿猴川で海苔とりが盛んに行われていたそうである。冬海苔とり作業での思いを歌った仁保に伝わる民謡、「海苔とり唄」を教材として取り上げることで、子どもたちはふるさとの音楽である民謡に親しみをもつことができると考えた。そして、広島方言で表している歌詞から昔の人々の気持ちや様子を想像したり、ゆったりとした本調子のふしを味わったりしながら、歌うことを楽しむことができると考えた。

(広島県郷土民謡・踊協会採譜)	三	二	一	三	二	一
	晩の六時は アーヒヤイノー	色がくろうても アーヒヤイノー	ひやい さむいのに 海苔とり なろうて けさも アンカで	あんたが たより 露霞渡松も 見てござる アーヒヤイノー	おきの海苔とりすんだらもどれ ひやいさむいは ねてわすれよ アーヒヤイノー	さむや 北風 よこまじ こうもや 嵐のふくものか アーヒヤイノー
	一時二時より 三時がかわい	白いおマンマの肌 に合う アーヒヤイノー	手を焼いた サムイノー	なかも サムイノー	あらし	海苔とり唄『仁保』

(5) 指導目標

- 1 地域に伝わる民謡「海苔とり唄」に関心をもち、進んで表現活動に取り組むことができるようにする。
- 2 「海苔とり唄」の特徴を感じ取り、歌い方を工夫することができるようにする。
- 3 詞の表す情景や気持ちを想像し、ふしを味わいながら歌うことができるようにする。
- 4 「海苔とり唄」の特徴やそのよさを味わって聴くことができるようにする。

(6) 指導内容と計画・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7時間

次	内 容	かかわりの場
第一次 (2時間)	身近なふるさとの歌を知ろう ①仁保の歌、発見！ ②「海苔とり唄」を歌ってみよう	a) 「海苔とり唄」との出会い。
第二次 (2時間)	ふるさとの歌を習おう ③④「海苔とり唄」を歌えるようになろう。	b) 地域の民謡同好会のみなさんとの交流。
第三次 (3時間)	わたしたちも歌い継ごう、ふるさとの歌を ⑤歌を伝えるための工夫を考えよう。 ⑥2年生に「海苔とり唄」を伝えよう。 ⑦ふりかえり	c) 少人数グループで練習。 d) 2年生との交流。

(7) かかわりの場の設定について

指導にあたって、支援として、次の3つのかかわりの場を設定した。

唄を大切にしてくられた方々から直接歌を伝えてもらう経験をすることによって、『自分も歌えるようになりたい』という意欲をもち、ふるさとの音楽（民謡）への興味・関心をもっていきっかけとなっていくと考えた。そこを手がかりとして、歌を口から口へと受け継いでいくことのおもしろさやすばらしさを感じる経験ができるようにしたい。

〈かかわりの場〉	〈ねらい〉
a) 地域に伝わる民謡「海苔とり唄」と出会う。 b) 地域の民謡同好会のみなさんと一緒に歌う。	民謡に興味をもち、歌に親しむことができるようにする。
c) 少人数グループ（縦割り班をベースとした3人～4人グループ）で、歌い方や伝え方の工夫をしていく。	歌のよさを感じながら、歌うことができるようにする。
d) 2年生に「海苔とり唄」を伝え、一緒に歌う。	歌の情景を思い浮かべて進んで歌い方を工夫することができるようにする。

歌と人とのつながりを感じながら民謡を歌っていくことで、音楽科における基礎・基本の力を伸ばすことができ、「気づき方や感じ方が豊かな子ども」が育っていくであろう。

(8) 学習活動の流れ

第一次 身近なふるさとの歌を知ろう

- ①仁保の歌、発見！
- ・私たちのふるさとはどこだろう？
 - ・東雲小学校の近くに伝わる唄があった！

広い通学区をもつ本校の子どもたちにとって、ふるさとといえる町は様々である。本題材では、子どもたちがどこをふるさとと思うかをたずねながら、今住んでいる「広島市」の各町から、私たちの小学校のある「東雲町」に目を向けていった。さらに、低学年での生活科の学習「えんこう川探検隊」を思い出しながら、えんこう川沿いの東雲町の隣町になる「仁保」や川向こうの町「向洋」を、ふるさととして結びつけていった。

はじめ、CD『広島県民謡集』の男声と尺八による演奏を鑑賞した。「アーヒヤイノーサムイノー」のおはやしの部分が広島弁でははっきりと聴こえるので、おもしろいという感想が多く聞かれた。また、自分が歌うのは恥ずかしいといった声も聞かれた。

- ②「海苔とり唄」を歌ってみよう
- ・向洋の海苔とり唄
 - ・仁保の海苔とり唄

実際に歌う際には、女声と三味線に編曲したものを使用した。「ドーソード. ソソド.」と、くり返す三味線の伴奏を、教師が演奏しながら、歌詞のみ提示して練習していった。五線楽譜にすると大変複雑になるので、耳で聞きながら各自が覚えやすい音から声を合わせていくようにした。こぶしの部分は、声を出してみることを第一とし、声をのぼすことを楽しみながら歌っていくようにした。

第二次 ふるさとの歌を習おう

- ③④「海苔とり唄」を歌えるようになろう。
- ・唄のバトンを受け取ろう。

仁保公民館で民謡を楽しんでおられる地域の方々に、ゲストティーチャーとして学校に来てい

【三味線と一緒に】



【民謡黄金会の皆さんとの交流の様子】



いただいた。歌を披露していただいたり、一緒に歌ってもらったりした。その中で、実際に海苔とりをしたことのある方が、当時の様子を話してくださった。また、その頃の写真を借りることができたので、写真を見ながら海苔とりへの説明を聞くことができた。子どもたちからは、皆さんがきれいな声で大変上手に歌ってくださりうれしかったという感想がきかれた。また、「海苔とり」についてや歌詞の中の意味のわからない言葉について質問することができ、ていねいに一生懸命答えてくださったから、わかることができてよかったという感想もあった。

第三次 わたしたちも歌い継ごう、ふるさとの歌を

⑤歌を伝えるための工夫を考えよう。

前時で教えてもらったことを出し合い、まとめる時間を取った。その後、2年生との交流についての提案と目的について話し、2年生との交流の時間の過ごし方を工夫していった。まず、海苔とり唄の歌詞や説明を各自が書きまとめて本づくりをした。その後、歌の練習をどのように進めるか、交流の中味が楽しくなるような工夫をグループごとに考えていった。

【手作りの本をもって練習】



【グループ練習】



- ・ペアになって練習しよう
- ・リーダー中心に進めよう（班長、副班長を決める）
- ・話の役割分担をして誰が何を話すか決めておこう
（一人ずつ話しをして楽しめるようにする）
- ・写真の説明をする
- ・めあてを決めてする ・何回も区切って歌う
などを相談して決めた。ユニークなものとして、唄に合わせて劇をするというものもあった。

⑥2年生に「海苔とり唄」を伝えよう。

この実践のヤマ場は、3年生が伝える側となって、習った歌を2年生に伝えていく場である。2年生とは、昨年わらべうたを通して一緒に遊ぶ交流をした経験がある。これまでの学習で、3年生には、受け継いだ貴重な歌「海苔とり唄」を身近な人にも聴いてもらいたい、伝えたいという思いが芽生えてきていた。その思いをもとに、2年生に歌のよさを真剣に伝えていった。

ふしを口で伝えるために、自分たちで考えた歌い方や練習の仕方を実際にやってみるようにした。また、昭和30年代の海苔とりの様子を写したパネルを掲示し、それを見ながら昔の海苔とりの様子を思い浮かべ、説明していった。

【昔のえんこう川や黄金山を見る】



設定した時間は30分であり、その中には十分にふしを伝えきれない様子も見受けられた。そこで、伝えようがんばった姿を認めつつ、長い年月の中で多くの人々を経て伝わってきたことのすばらしさを2年生と共に感じ取れるように、言葉がけをした。

⑦ふりかえり

ふりかえりは、活動のたびごとに感想を発表する場を設けることによって、めあてに対して一人一人の思いをまとめてもつようにした。題材のしめくりとして、2年生との交流についての感想を書いたり、歌のことを絵に描いたりした。2年生からは、お礼の手紙をいただいたので、一人一人に渡し、みんなで読み合った。

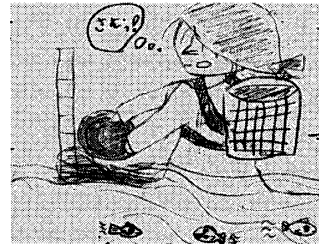
【子どもたちの感想から】

- 2年生に教えるときに、前に教えてくださった人たちが私たちに教えてくれるときの苦勞がわかりました。わからない言葉や教えたりうまくこれからも教えるようにという風にいるいろいろなことを2年生に教えてあげました。でもとっても楽しかったです。
- 「アーサムイノーヒヤイノー」という場面をおぼえてくれたりして、とてもうれしかった。とても冷たいように歌えた。
- 私は2年生と一緒に歌ってとても楽しかったです。私もいい思い出ができました。ふるさとの音楽の授業がとてもおもしろかったです。
- 人から教わるのは簡単だけど、人に教えるのはむずかしかったです。
- 50年たっても海苔とり歌を歌ってみせる。50年たって自分の子どもに教えてあげる。

【ふりかえりの様子】



【情景を思い浮かべて】



3 考察

(1) 気づき方や感じ方が豊かになったか

子どもたちは、一回一回の活動に新鮮な気持ちで期待感をもって取り組むことができた。初めての民謡にとまどいながらも、自分なりに精一杯声を出していた。次第に独特のふしまわしを楽しんだり、水の冷たさを想像して当時の人の気持ちを思い浮かべたりして歌うようになっていった。そのうち、最初は恥ずかしそうに歌っていた「ヒヤイノーサムイノー」の部分の歌い方が、大きく変わっていった。えんこう川の冷たい水を触った経験を思い出して、表情や身振りをつけて歌う子どもがふえていった。声の調子にも気持ちがこもるようになった。唄にこめられている気持ちを感じ取り、聴いてくれる相手を意識しながら、仲間と声をそろえようとくり返し練習に取り組むことができたことによる成果と考える。

(2) 相手を意識して表現することによって、表現の質が高まったか

交流の場では、お客様を迎えた時のように緊張した雰囲気の中で、歌うことに一生懸命に取り組んでいた。何とか自分たちの学習した歌を伝えようと、あの手この手で相手にアプローチしていく姿には、ほのぼのとしたあたたかさややさしさも感じられた。一方で、2年生が思うように聞いてくれない、自分たちも協力して活動できない、どう教えてよいかわからない、はずかしい、うまく歌えなかったという感想をもった子どももいた。1回30分という時間設定は適当であったが、もう一度互いの歌声を聴き合う交流の場をもてばさらに唄が定着し、満足度も上がったのではないかと思われる。

【2年生からの手紙】



音楽の授業楽しかったよ
十二月十六日の四時四十分のり
りつたを覚えてくれてありがた
うさくらもりのりりりりりり
の気もちがわかる歌でしたわ
たしもう一年の二年生であ
るにハイトンツツツツツツ
みたりです。すみ線という葉
にあわせてつたうのはわか
少しでも、ちかだらむずかし
くもりました。でも、うまく
きました。三年生のみなさん、川

(3) 人と人とのつながりを感じ、それを大事に思う気持ちが育ったか

2年生の協力によって、3年生もよりいっそう本気になることができたと思われる。互いに学ぼうとする姿勢をもって有意義な交流とすることができた。一つの唄にこめられた地域の歴史を知り、長い歳月を経ても変わらない人の気持ちに気づくことができたとき、子どもたちは音楽のよさに、気づいたのではないだろうか。祖父母や家族に「この唄知ってる？」と歌ってきかせてあげた子どももたくさんいた。このように、時代や世代を越えたつながりを広げることのできる題材を、今後も継続して実践していきたい。